

資料

慢性期統合失調症患者が化粧をやめた理由

Why Patients with Chronic Schizophrenia Stop Wearing Makeup

近藤美保¹⁾

Miho Kondo

キーワード：統合失調症、化粧、自信の回復

Key words : Schizophrenia, Makeup, Regaining confidence

要旨

化粧習慣があった慢性期統合失調症患者が、発症後、入院生活の中で化粧をやめた理由について明らかにすることを目的とした。精神科病院に入院中の慢性期統合失調症患者8名を対象に、半構造化面接を実施した。化粧をやめた理由に関する記述について、発症前、発症後、現在と時期を区切りカテゴリー化を行い、質的記述的方法により分析をした。化粧をやめた理由と背景には、【入院による不自由な化粧品使用環境】【長期入院生活により、化粧をやる機会、やる気がなく他患者との関係からしない】【思考障害と陰性症状の影響】があった。現在の患者には、【化粧をするとききれいになれる・化粧願望】【素顔の状態がよい】【肌の手入れとして基礎化粧品を使い整容に気を配っている】【基礎化粧品ができることになったことで自分の病気が良くなってきた実感がある】があった。長期入院、統合失調症の症状が化粧行動に影響を与えていたが、患者は未来への希望を抱いていた。化粧という視点からの看護支援が将来の見通しを持たせ自信の回復につながる可能性がある。

I. はじめに

自己の整容に関心を持つことが困難な急性期の状態が落ち着き、安全面からの物品持ち込み制限が緩和されても、化粧をしない状態が続いている統合失調症患者がいる。統合失調症のうち、残遺型の特徴として、感情鈍麻、社会的ひきこもり、奇矯な行動、非論理的思考、軽度の連合弛緩が認められることが多い (Sadock, Sadock and Ruiz, 2016) とされる。また、統合失調症の急性期の陽性症状がおさまってもそれに対する一種の反動ないし後遺症が、ゆっくりと改善傾向を示すものの、ほぼ生涯にわたって持続する症状を陰性症状と呼び慢性期の症状にほかならない (春日、2020) とされる。本研究においては、残遺型の統合失調症

の特徴を示し、急性期の症状の後に陰性症状が主となった患者を慢性期統合失調症患者として、化粧をやめた理由について検討した。

一般的に身体の治療で入院している患者のうち、化粧習慣があった者は、退院後、化粧を再開すると考えられる。身体の治療を行う際に、化粧が治療の妨げになることがあるため一時的に中止するが治療が終わると元の生活様式に戻るためである。精神科の慢性期病棟においても、可能な限り、地域での生活に移行していけるよう日常を取り戻すことが必要であり、入院前に化粧をしていた者にとっては、化粧はむしろ意味のある行為であると考えられる。しかし、化粧をして日中過ごす慢性期統合失調症患者をみかけることはほとんどない。日

1) 静岡県立大学看護学部 School of Nursing, University of Shizuoka

本の成人女性が化粧をすること、しないことを自由に選択できる環境にあるのと同様に、しないことを選択する自由がある。しかし、慢性期統合失調症にて長期入院している患者が、自らの意思で化粧をしないことを選択しているのか明らかではない。

化粧は、自分の価値を守り協調的な対人関係を結ぶものとされ(大坊、2001)、女性の主観的な心理効果には、積極性、リラクゼーション、気分の高揚(対外・対自)、安心がある(宇山・鈴木・互、1990)。また、素颜時に比較して、自己化粧と技術者による化粧ともに、自信度が高まり、化粧行為そのものが自信や満足などポジティブな心理的効果を持つことが示唆されている(余語・浜・津田・鈴木・吾、1990)。化粧をする人にとって、化粧は自己を保ち、他者との関係を円滑にする手立てとなるといえる。また、化粧は統合失調症女性患者の現実感覚を回復させ、ADLを改善する効果があるとされる(柴田ら、2014)。さらに、化粧療法を受けた女性のうち気分プロフィール検査(POMS)による心理状態評価の活気が低いグループは、素颜の写真を呈した時と比較し化粧顔の写真呈示した際に、前頭葉のOxy-Hbが有意に増加した(池内ら、2017)。化粧をした自己の外観を認識することで、抑うつ傾向にある患者の脳機能が改善する可能性が示されている。化粧には、外観を整えるだけでなく、日常生活行動の改善や精神症状の安定を図ることで他者との関りをサポートする可能性がある。

精神科の看護として、身だしなみや化粧の変化を観察し、病状の変化を捉え援助につなげることは経験的に行っている。しかし、患者が化粧をしないことを自ら選択をしているのかは明らかではなく、また化粧行動の変化が統合失調症の症状による影響なのか明確にされていない。慢性期統合失調症患者が化粧を再開しない状態には何が影響しているのかを知ることで、化粧を用いた看護介入が実践されると考える。

発症前に化粧の習慣があった慢性期統合失調症患者が、発病後入院生活の中で、化粧をやめた理

由、化粧を再開しない理由について明らかにする。

II. 方法

1. 用語の操作的定義

化粧とは、ファンデーション・チーク・アイシャドウ・マスカラ・口紅・眉墨等のメイクアップを目的としたものとした。皮膚の保護を目的とする化粧水・乳液・美容液・クリーム・リップクリーム等は基礎化粧として区別した。

2. 研究対象者

入院中の慢性期統合失調症患者のうち、発症前に化粧習慣があったが現在行っていない者8名。

条件として2週間以内の処方変更がなく精神症状が安定している者、録音することが心理的負担にならない者、自己の判断にて同意書をかかわすことができ、60分の面接に耐えられると主治医が判断し許可が得られた者とした。

3. 調査依頼方法

精神科単科の病院3施設の病院長および看護部長の許可を得て、主治医に対象条件を満たす患者を選定してもらい研究対象候補者とした。研究者より研究概要を師長会議にて説明をし、師長から研究対象候補者へ研究の概要を口頭で説明して頂いた。研究者からの説明をすることに了解した方に、研究者が依頼文書と口頭で再度詳細を説明し同意を得た。

4. データ収集の内容と方法

病院内の個室にて、インタビューガイドに基づく半構造化面接を行った。内容は、化粧を初めてしたのはいつ頃か、どのような化粧をしていたか、化粧をしなくなったのはいつ頃か、その理由ときっかけ、化粧をすることをどのように思うかとした。データ収集は2008年8月～9月に行った。

診療録から基本データとして、性別、年齢、発症年齢(または初診)、入院年数、入院回数、服薬量、家族構成を収集した。

5. 分析方法

逐後録から化粧をやめた理由に関する記述を抽出しデータ化し質的記述的方法により分析した。データの語りのまとまりごとにコード化を行った。コード名は抽象度を上げ過ぎずデータの言葉が活かされるよう留意してつけた。コードを、相違点・共通点をもとに比較分析、抽象化しながらカテゴリー化した。分析の全過程において、信用性と確実性の確保のため、経験の豊かな質的研究に携わる研究指導者からスーパーバイズを受けた。

6. 倫理的配慮

本研究は、愛知県立看護大学の研究倫理審査委員会の承認（承認番号19愛看第271号）と研究対象者の入院施設の倫理委員会の承認を受けて実施した。研究対象者には、研究の趣旨、協力は自由であり研究を断ることで診療の内容や、療養生活上のサービスの質や内容に何も変化が生じないこと、治療とは直接的な関係はなく、研究協力の決定は自由意思であることが保証されることを説明し、対象者本人から書面により同意を得た。

面接時には、化粧をやめたことなどに関する思いを話す際の心理的負担に配慮し、面接を中止できることを説明した。また研究者から見て疲労感が感じられる際は判断して中止、対応を病棟看護師に依頼することを、あらかじめ説明した。

Ⅲ. 結果

1. 研究対象者の概要

平均年齢62.5歳、最年少は50歳、最年長は75歳。入院年数平均22.9年、最短年数は8か月、最高年数は44年。入院回数平均6.6回、最小入院回数は2回、最大入院回数は22回。発症年齢または初回入院年齢は平均24.3歳、最も低い入院時の年齢は20歳、最も高い入院時の年齢は37歳であった。

2. 慢性統合失調症患者が化粧をやめた理由と背景に関するカテゴリー構成の概要

慢性統合失調症患者が化粧をやめた理由と背景

について、発症前、発症後、現在と時期を区切りカテゴリー化を行った。

カテゴリーは【 】,サブカテゴリーは『 』、患者の言葉を「 」、補足する言葉を（ ）として説明する。

1) 発症前 化粧習慣

1カテゴリー、2サブカテゴリーが抽出された。発症前の化粧への関心や、化粧のきっかけ、どのような時に化粧をしていたかについて示しており、【化粧のきっかけと習慣】は『人生の節目や就職をきっかけに化粧をした』、『仕事の時や外出時には化粧をしていた』により構成された。

2) 発症後 化粧をやめた理由

4カテゴリー、14サブカテゴリーが抽出された。統合失調症の症状による【思考障害と陰性症状の影響】と、入院生活の制限による【入院生活による不自由な化粧品使用環境】【長期入院により、化粧の必要性や機会の減少】があった。さらに、【自己を否定する気持ちから起きる化粧意欲低下】により構成された。以下にカテゴリーごとの説明をする。

(1) 【思考障害と陰性症状の影響】

このカテゴリーは、化粧をやめた理由に統合失調症による思考の障害や陰性症状が影響していたことを示す7サブカテゴリーから構成された。『面倒になりやめた』には、「休んでいるからお化粧はしてはいけないよねえ。疲れて休んでから・・・お化粧はしてはいけないと思って。でもそうして、起きて、もう全然、お化粧するって気持ちないですよ」や「こうなったらね、あの一、はあ（沈黙）・・・もう（沈黙）・・・めんどくさくなっちゃって（沈黙）・・・。本当のこと言うと」が含まれた。

『発病により脳がおかしくなり入退院により化粧をする気がなくなった』は、患者は化粧をしなくなったのは「理由はね、病気がね、発達してね」や「脳がおかしくなったからしないっけ」が含まれた。

『化粧品を盗む人がいる、目立つと意地悪されるので他者との関係からしない』は、患者「使って

いない・・・盗まれちゃうから。盗む人がいるんですよ」と化粧品が盗まれるのでしないことや、「外歩くとき、(化粧を)つけていくと意地悪されて傷がつくからね」と他患者との関係を化粧しない理由が含まれた。

『自分の顔を変えてしまうのではない』は「自分自身の顔でいいと思ってしなかった。変わっちゃうなと思って、意志が弱いから」が含まれた。

『看護師にされた化粧が残りシミになっている』は「白いお化粧をしてくれたんですけどねえ。そのお化粧を落とすのにね、結局、落とすまでは・・・シミが入っちゃったんですよ」や自分の顔を近づけ顔のシミを見せ「これつけられちゃったんですよ。何つけたんですよ。看護婦さんがつけちゃったんですよ」が含まれていた。

『化粧品も用意しないで入院させられ肌が汚れてしまったからしない』は「シミ・そばかすも入院してできちゃって。用意しないで入れられちゃったもんで。突然入れられちゃったもんで」が含まれた。

『化粧を落とす時に水を使うと病院に迷惑をかける、病院への気兼ねからしない』は、「私、一番手を洗うほうだと思うんですよ。だもんでね、お化粧落とす時って水いるでしょ。だから悪いと思って。だからお化粧はしない」が含まれていた。

(2) 【入院生活による不自由な化粧品使用環境】

このカテゴリーは、不自由な化粧品使用環境により化粧をしないことが示されており『病状や入院病棟により入手できる化粧品に制限がある』、『化粧品を購入するのは金銭的に足りない』の2サブカテゴリーから構成された。

『病状や入院病棟により入手できる化粧品に制限がある』は「売店で化粧水と乳液買ったんだけどね、UVじゃなかったもんでね、ダメ。持っているけど。今回初めて外泊に行けてね。これまで措置入院だったからね。家からUVのね、化粧水と乳液持ってきました。」が含まれた。『化粧品を購入するのは金銭的に足りない』は、「使い始めはたくさんの化粧品使わなきゃなんないから・・・(沈黙)また始めるとなると化粧品を買わなければ

ならないし。だけどこの今の状態で・・・」が含まれていた。

(3) 【長期入院により化粧の必要性や機会の減少】

このカテゴリーは、長期入院により化粧の必要性や機会が減少したことを示しており、3サブカテゴリーから構成された。

『入院生活では化粧をする機会、必要がない』は、現在の入院生活から、「外も行かないでしょ。外出するときはお化粧もしてたけんね。でも部屋中にいるからしてない」としていた。『長期入院により面会が親から兄弟に代わり、化粧をして出かける機会が減った』は「外出もしないから。外出するときはお化粧もしたけんね(沈黙)・・・10年前ぐらいのほうが・・・外泊が年に2回、外出が月に1回でした、母が来て。今は弟が来てくれる(沈黙)・・・」が含まれた。

(4) 【自己を否定する気持ちから起きる化粧意欲低下】

このカテゴリーは、自己を否定する気持ちからの化粧意欲の低下が示されており2サブカテゴリーより構成された。

『馬鹿、ダメになり化粧をしなくなった』は「あの一、結局馬鹿になったもんでね、言い方が悪いんですけどね」や「もう一度できるならば自分らしくやりたいと思ってたんだけど、それもちょっとしただけであんまり他は考えたことがありません」が含まれた。『自分がキレイではないからやる気がなくなった』は、「あんまりキレイじゃないもんでねえ、やめました。嫌になったのでやめました」や「前はお化粧してたからさあ(沈黙)・・・その辺がもうダメだからね。うーん、ダメになっちゃったからさ」が含まれた。

3) 現在 今後の化粧に対する思い、希望

1カテゴリー、4サブカテゴリーが抽出された。現在化粧はしていないが今後の化粧に対する思いや希望が示され、【化粧をするとききれいになれる・化粧願望】、【素顔の状態がよい】、【肌の手入れとして基礎化粧品を使い整容に気を配っている】、【基礎化粧ができることになったことで自分の病気がよくなってきた実感がある】により構成された。

表1 慢性統合失調症患者が化粧をやめた理由と背景

時期	内容	カテゴリー	サブカテゴリー (コード数)
発症前	発症前の化粧習慣	化粧のきっかけと習慣	人生の節目や就職をきっかけに化粧をした (7) 仕事の時や外出時には化粧をしていた (7)
発症後	化粧をやめた理由	思考障害と陰性症状の影響	面倒になりやめた (5) 発病により脳がおかしくなり入退院により化粧をする気がなくなった (4) 化粧品を盗む人がいる、目立つと意地悪されるので他患者との関係からしない (4) 自分の顔を変えてしまうのではない (3) 看護師にされた化粧が残りシミになっている (2) 化粧品を用意しないで入院させられ肌が汚れてしまったからしない (2) 化粧を落とす時に水を使うと病院に迷惑をかける、病院への気兼ねからしない (1)
		入院生活による不自由な化粧品使用環境	病状や入院病棟により入手できる化粧品に制限がある (10) 化粧品を購入するのは金銭的に足りない (2)
		長期入院により化粧の必要性や機会の減少	入院生活では化粧をする機会、必要がない (5) 長期入院により面会が親から兄弟に代わり、化粧をして出かける機会が減った (2) 年をとり人と接することがなくなった (2)
		自己を否定する気持ちから起きる化粧意欲低下	馬鹿、ダメになり化粧をしなくなった (3) 自分がキレイでないからやる気がなくなった (2)
現在	今後の化粧に対する思い、希望	化粧をするときれいになれる・化粧願望	化粧に関心がある、女性のたしなみ (6) 退院したら化粧をしてやりなおしたい (3) ナースや他患者の化粧がキレイだと思うこともある (2)
		素顔の状態がよい	化粧による肌荒れが気になるのでしたくない (5) 自分の素顔が好きだから化粧はしない (3) 化粧をしないほうが肌がキレイと言われたことが自慢 (2)
		肌の手入れとして基礎化粧品を使い整容に気を配っている	お手入れとして基礎化粧品が生活習慣になっている (7) 加齢に伴う肌の変化が気になり基礎化粧品を使う (4) 基礎化粧品だけが、鏡をみて整容には気を配っている (4)
		基礎化粧品ができることになったことで自分の病気が良くなってきた実感がある	基礎化粧品ができることで自分の病気がよくなってきた実感がある (2)

以下にカテゴリーごとの説明をする。

(1) 【化粧をするときれいになれる・化粧願望】

このカテゴリーは化粧への関心や思いを示しており3サブカテゴリーより構成された。

『化粧に関心がある、女性のたしなみ』は、「1本ほしい(口紅)。利口なら買ってくれるでしょう

けどね、入院してても」や「流行に目がとまる、女の人ですから、お化粧品にはついていきたいですよね」と語られていた。『退院したら化粧をしてやりなおしたい』は、「一応全部、一からやってみようかと思って。お化粧品も。退院したら」や「上にあがってきたらね(転棟)、化粧品の注文あります

かって言うもんでね、みんながファンデーション買ったり、口紅買ったりとかね。私は化粧水とか買ってやってますけどね。だけど休んでいた間に急にお化粧をやめてしまって、やらなくなったけども今からという感じなんですよ」が含まれた。『ナースや他患者の化粧がキレイだと思うこともある』は、「キレイに化粧してるなって思うときもあるんですけどね」が含まれた。

(2) 【素顔の状態がよい】

このカテゴリーは、素顔の状態がよいので化粧をしないことを示しており、3 サブカテゴリーにより構成された。

『化粧による肌荒れが気になるのでしたくない』は、「化粧はね、頻繁にやると肌がきれいじゃなくなると嫌だなと思って」が含まれた。『自分の素顔が好きだから化粧をしたくない』は「化粧して美人に見えるのもいいけど、私は肌をキレイにしたほうがいいと思うだよ」と語られた。『化粧をしないほうが肌がキレイと言われたことが自慢』は、「化粧しなくてもきれいな顔してるって言われました。スベスベしてるでしょ？」が含まれた。

(3) 【肌の手入れとして基礎化粧品を使い整容に気を配っている】

このカテゴリーは、化粧をしていないが基礎化粧品を使って整容に気を配っていることを示しており3サブカテゴリーにより構成された。

『お手入れとして基礎化粧品が生活習慣になっている』は「化粧水や乳液だと、何ていうか、お手入れって感じ。自然な感じでやってる感じが」が含まれた。『加齢に伴う肌の変化が気になり基礎化粧品を使う』は「基礎化粧品を続ける理由は、肌が小じわになっちゃうから使い続けるつもりで」が含まれた。『基礎化粧品だけが、鏡をみて整容には気を配っている』は、「キレイにしています。クリームでね」が含まれた。

(4) 【基礎化粧品ができることになったことで自分の病気が良くなってきた実感がある】

このカテゴリーは、1 サブカテゴリーにより構成されていた。

『基礎化粧品ができることで自分の病気がよくな

ってきた感覚がある』は「頭をケガして（発病）。ケガ（発病）したから化粧しなくなっちゃった。それでだんだん自分で良くなってきたから化粧水とか栄養クリームで今、止まっていますけど」が含まれた。

IV. 考察

化粧をやめた理由と背景について、長期入院による化粧行動の変化、統合失調症の症状が化粧行動に与えた影響の視点から考察する。

1. 入院環境と長期入院が化粧行動に与えた変化

化粧をやめた理由と背景のうち、精神科病棟への長期入院による化粧行動の変化として【入院による不自由な化粧品使用環境】【長期入院生活により、化粧をやる機会、やる気がなく他患者との関係からしない】が存在していた。精神科病院の制限のある環境が患者の化粧に影響を与えていることが推測された。看護師が病棟内への持ち込み物品について、判断に迷った物品として、男女ともに基礎化粧品があり、割れた時が危険であるとして、瓶入り化粧水があげられていた(川合・永田、2014)。医療保護入院などの非同意入院患者の多い病棟と任意入院患者の多い病棟では、持ち込みできる物品に違いがある。

本研究は、3 か所の精神科単科の病院において調査を行った。閉鎖病棟に入院する患者には、化粧品購入について何らかの制限が生じていた。加えて病院、病棟ごとに化粧品購入が病棟スタッフを通じての購入が可能であったり、外泊や外出時に購入することが可能な状況であったりと入院環境に差があり、化粧の再開に影響をしていたことが予測された。

患者は基礎化粧品ができるようになったことで、自分の病状が良くなってきたと捉えていた。また、基礎化粧品の使用で今は止まっていると述べていた。このことから、病状に応じて化粧品使用を可能とすることが、患者の病気が良くなってきた感覚、回復感を高めることにつながるのではないかと考える。

また、長期入院による化粧行動の変化がみられた。加齢に伴い女性は、メーキャップ、ケアの順に化粧行動をやめていく傾向にある(八田、2008)とされている。しかし患者は、入院を機会に化粧品の使用が制限され、長期入院により化粧の必要性がなくなり化粧を再開する機会がないままの状態が続いていた。一般的に地域で生活をする女性とは異なり特殊な入院環境の影響を化粧行動が受けていたと考える。また、Web アンケート調査で20～59歳の女性を対象とした調査では、化粧をしている人の年齢に有意な差があり、化粧をしている人は50代に多く、化粧をしていない人は20代に多いことが示されている(吉田ら、2022)。しかし、この調査では化粧には、毛染めが含まれているため、本研究が意図する化粧とは相違がある。ただし入院患者においても、化粧行動が選択できる環境があれば、加齢に伴い化粧行動をやめるだけではなく、加齢の影響に対して外観を整える選択をする可能性があるといえる。

化粧は、化粧中の満足や外見の欠点の補償といった即時的な効用だけでなく、対人的な積極性や自信といった、人格の深い面における効用にもつながっているとされる(松井・山本・岩男、1983)。**【自己を否定する気持ちから起きる化粧意欲低下】**では、入院前は化粧をしていた患者が、化粧をしなくなった環境において、化粧による効用を得られなくなり、自己を否定する傾向がみられ、化粧意欲が低下したことが示されていた。

以上のように、精神科病棟における長期入院と入院環境が化粧行動に影響を与え、患者の意欲や自尊心の低下を引き起こす可能性が示された。入院中の患者の回復状況に応じて、化粧品の管理が適切に行えるかアセスメントを行い、退院後の地域生活に向け、希望に応じて化粧品使用を可能にすることは、患者の回復感を高め、退院後の地域社会での生活に繋がると考える。

2. 統合失調症の症状が化粧行動に与える影響

化粧行動の変化には、**【思考障害と陰性症状の影響】**があり、統合失調症の症状が影響していた。

統合失調症は、徴候と症状もさまざまであり、知覚、情動、認知、思考および行動の変化などが認められる(Sadock, Sadock and Ruiz, 2016)。患者は、看護師にされた化粧がシミとなって残っているとことや、化粧をすると他患者から意地悪されて傷がつくといったことを述べていた。これは、思考内容の障害がみられ、妄想的な思考により、化粧をしない選択をしていたと考える。また顔のシミを看護師につけられたと述べた内容は事実とは異なり、認知の歪みが化粧行動に影響を与えていた。

患者は発病後について、疲れて休んでいて起きたら化粧をする意欲がなくなっていたと述べていた。この背景には陰性症状による情動の平板化や、意欲低下があったと考える。しかし、現在の患者は、**【化粧をするときれいになれる・化粧願望】****【素顔の状態がよい】****【肌の手入れとして基礎化粧品を使い整容に気を配っている】****【基礎化粧品ができることになったことで自分の病気が良くなってきた実感がある】**とされ、今後の化粧に対する思いや希望を持っていた。

本研究は2008年にデータ収集がされており、当時と比較して様々な変化があり古いデータであることは否めない。2011年には東日本大震災が起き、2020年以降は新型コロナウイルス感染症の流行により、制限のある生活が余儀されなくされ、人々の価値観はこの調査時と大きく異なっているといえる。化粧どころではない危機的状況があったことが推測される。しかし、東日本大震災における精神科看護師の体験には、看護師自身命の危険にさらながらも、患者を安心させるために日常を取り戻すことを大切にしていた(高橋ら、2020)ともされる。またコロナ禍のマスク着用による化粧行動の減少によって、メイク時の感情が変化し、それが化粧満足度に媒介されて生活満足度の低下に影響するモデルが確認されている(鈴木・矢澤、2021)。入院患者のうち、新型コロナウイルスによる行動制限により、面会の中止や外出・外泊の中止といった影響を受けた者もいた。命に関わる危機的な状況が落ち着いてから日常を取り戻すこと

の一例として、化粧習慣を取り戻す支援をすることは、精神科入院患者の生活満足感を高め生きる意欲を支えることにつながると考える。

入院している統合失調症者の人生の意味の関連要因について明らかにした調査では、将来の見通しを持つことや過去を受け入れることが、未来への希望や自分で将来を切り開く自信に影響した(小川・森、2022)とされる。本研究において、患者は、未来への希望をもっており、化粧という視点から将来の見通しを持てるような看護支援をすることで、さらなる自信の回復につながるのではないかと考える。

V. 本研究の限界と課題

本研究の限界として、対象施設が同県内の3施設であり対象者数が8名と少ない。データに偏りがあることは否めず一般化には限界がある。精神科病棟への入院や統合失調症の病状により化粧をやめた患者には、未来への希望があった。今後、地域移行支援の一環として、患者が化粧行動を再獲得できるような介入の時期の見極めについて明確にしていくことが課題である。

VI. 結論

慢性期統合失調症患者が化粧をやめた理由と背景について以下のことが明らかになった。

1. 制限のある精神科病棟の入院環境や長期入院が意欲や自尊心の低下を引き起こし、化粧行動に影響を与えていた。
2. 統合失調症の症状のうち、思考障害と陰性症状が化粧行動に影響を与える可能性が示唆された。
3. 化粧をやめた慢性期統合失調症患者は化粧について未来への希望をもっていた。化粧を用いた支援が将来への見通しを持たせ自信の回復につながる可能性がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に深く感謝申し上げます。丁寧なご指導を賜りまし岩瀬信夫先生(元愛知県立看護大学)、小松万喜子先生(元

愛知県立看護大学)、篁宗一先生(静岡県立大学)に深謝します。

付記

本研究は愛知県立看護大学大学院看護研究科に提出した修士論文の一部を加筆・修正したものであり、本研究の一部を、第30回日本看護科学学会学術集会にて発表している。

本研究における利益相反は存在しない。

文献

- Benjamin J. Sadock, Virginia A. Sadock and Pedro Ruiz(2014/2016). 井上令一(訳), カプラン臨床精神医学テキスト第3版DSM-5診断基準の臨床への展開. 東京都: 株式会社メディカル・サイエンス・インターナショナル.
- 大坊郁夫(2001). 化粧の心理的・社会的意義. 香粧会誌, 25(4), 256-262.
- 八田武志(2008). 中高年者の化粧行動の変動様態と前頭葉認知機能との関連に関する神経心理学的研究. コスメトロジー研究報告, 16, 100-104.
- 池内眞弓, 猿渡敬志, 高田夕実, 下田美香, 中島礼子, 灰田宗孝(2018)化粧療法の有効性に関する研究—fNIRSによる脳機能の評価. 東海大学健康科学紀要, (23), 3-10.
- 春日武彦(2020). 援助者必携はじめての精神科. 東京都. 医学書院. 121.
- 川合法子, 永田真里子(2014). 精神科病棟への持ち込み物品に対する看護師の意識調査. 日本精神科看護学術集会誌, 57(1), 66-67.
- 松井豊, 山本真理子, 岩男寿美子(1983). 化粧の心理的効用. マーケティング・リサーチ, 21, 30-41.
- 小川賀恵, 森千鶴(2022). 入院している統合失調症者の人生の意味の関連要因. 日本看護研究学会, 44(5), 709-719.
- 柴田早苗, 寺西裕美子, 藤井千恵子, 長濱勝治, 村田桃代, 山本明弘(2014). 精神科閉鎖病棟に入院する統合失調症患者の日常生活行動に

- おける化粧の影響. 明治国際医療大学誌, 11, 9-13.
- 鈴木公啓, 矢澤美香子 (2021). コロナ禍のマスク着用に伴う化粧行動の変化はどのような心理的影響を及ぼすか. 容装心理学研究, 1 (1), 5-12.
- 高橋葉子, 田中美恵子, 阿部幹佳, 山内典子, 内野小百合, 異儀田はづき・・・近澤範子 (2020). 東日本大震災における精神科看護師の体験. 日本精神保健看護学会誌, 29 (1), 1-12.
- 宇山侑男, 鈴木ゆかり, 互惠子 (1990). メーキャップの心理的有用性. 香粧会誌, 14 (3), 163-168.
- 余語真夫, 浜治世, 津田兼六, 鈴木ゆかり, 互惠子 (1990). 女性の精神的健康に与える化粧の効用. 健康心理学研究, 3 (1), 28-32.
- 吉田和枝, 曾山小織, 米田昌代, 長谷川昇, 松野智香子, 那波潤美 (2022). 化粧品使用に関する態度と健康増進ライフスタイルとの関連性. 石川看護雑誌, 19, 13-24.

Abstract

The purpose of this study was to find out why chronic schizophrenia patients who had a habit of wearing makeup stopped wearing makeup during their hospitalization after the onset of symptoms. Semi-structured interviews were conducted with eight patients with chronic schizophrenia admitted to a psychiatric hospital. The descriptions of the reasons for stopping wearing makeup were categorized chronologically into pre-symptomatic, post-symptomatic, and current periods, and analyzed using a qualitative descriptive method. The reasons and background underlying patients stopping wearing makeup were: "Inconvenient environment for using cosmetics due to hospitalization", "Due to long-term hospitalization, there is no opportunity or motivation to wear makeup, or makeup is not worn due to relationships with other patients", and "Effects of thought disorder and negative symptoms". Current patients indicated the following: "Makeup makes you look beautiful / a desire to use make up", "A face without makeup is in good condition", "I use basic cosmetics to take care of my skin and pay attention to beauty care", and "Now that I am able to wear basic makeup, I feel like my illness is getting better". Although the patients' long hospitalizations and schizophrenia symptoms affected their cosmetic-related behavior, they had hope for the future. Nursing support from the perspective of makeup may give patients a better outlook on the future and help restore their confidence.